

マーケット・アイ (99/9)

視点・株式市場

株価は調整局面に入ったようだが、日々の株価動向に一喜一憂しても仕方ない。今日本経済に何が起きているのか、これが株式市場や金融市場を見る場合の私の視点である。

下の表は、昨秋安値から今週22日迄の3種の株価指数推移である。何が見えるだろうか。

	10月9日	9月22日	上昇率
日経平均	12,879	17,325	34%
TOPIX	982	1,479	50%
店頭平均	620	1,901	206%

(小数点以下は切り捨てています)

この表から幾つか云ってみたい。それぞれの指数の上昇率に差があるが、日経平均が最も低いのは当然だ。日経平均を構成する225銘柄は、8割以上が官僚的で株式持合いに固執している古びた企業と見られるからだ。それに比較してTOPIX(一部市場全銘柄加重平均指数)がやや高いのは、一部市場に新しい企業群が参入して指数を少し押し上げているからだ。でも全体で一部市場は古ぼけた会社が多く、日経平均やTOPIX指数を押し上げる力に乏しい。それらに比べ3倍以上に先駆急騰した店頭市場は活力がある。この欄で何度か述べたが、店頭市場に新しい日本を感じさせる企業が多いことが上昇の大きな要因であると思う。

日本の株式市場は新しい上昇波動に入った。別に株式投資を勧める積もりはないが、債券に代わって株式の時代が到来したと見ている。

地銀4行への資本注入の後

今月、足利・北陸・琉球・広島総合の4地銀に公的資金による資本注入が決定した。記者会見資料によると、無謀な東上作戦で膨大なお金をどぶに捨て実質債務超過状況に陥った足利銀行のトップの言葉は無責任極まるように(私には)聞こえたが、それは別として、曲がりなりにも地銀・第二地銀の再編劇がスタートした。金融再生委員会は、地銀を中核行・競争行・再編行と3種類に分類位置づけしているようだが、新金融検査マニュアルの適用が開始されるこの9月中間決算数値が出揃う11月には公的資金を申請する(させられる)地方銀行が幾つも出てくるだろう。それをテコに再編を進めるのが再生委の意向だと思われる。

大手銀行の再編がドラスティックに進行し始めた。地域金融に不可欠の存在という現実に胡座をかき危機感に乏しかった地方銀行にも本格的再編が始まろうとしている。中小企業経営者はそう考えておくべきだ。

外資外資・地銀地銀

大手金融機関の若手有能行員達が外資系金融機関の草刈り場となっている。経営トップは金融再生委員会に経営改善計画を提出して安堵しているかもしれないが、若手行員達の危機感は強い。いくらリストラを実行しても将来のビジョンが見えないのでは若手を引き止めることは難しい。その一方で、狭き門である外資に行けない人達が地方の地銀の門を叩いている。

先日ある東北の地銀が証券関係の人材を募集したら、都銀マンを始め多くの金融マンが応募したと聞いた。地方銀行に行って何をしたいのか良く判らないが、そんな所にも現在の銀行員達の心象風景が見えるようだ。

円高狂想曲!?

円高に騒いでいる人達がいる。景気や株価に悪影響と云ういつもの面々のようだが、こういった方々にとって円高も一つのビジネスなのであろう。滑稽に見える。怖れるべきは、円高よりもむしろ円安だ。

戦後を一寸振り返ってみれば直ぐ判るが、日本の経済力上昇は結果として円高となって表われた。もちろんリチャード・クー氏が指摘したように「悪い円高」(95年の円高)もあるには違いないが、全体として見れば円高が日本企業を強くしたのは間違いない(と私は思う)。通貨暴落で苦難に陥った経済国家は数え切れないが、通貨価値上昇で駄目になった国のあることを寡聞にして知らない。

投資か詐欺か、プリンストン債

日本の大手企業が76社も手を出して1,000億円以上の損失を被ったというプリンストン債。一体彼らは何を目的にこうした私募債を購入したのだろうか。単に横文字(高利回り)に騙されたのか、それとも違った目的があったのか。

笑い事でも他人事でもない。今後もこの手のテクニック商品が横行するのは避けられないと思っておいた方がいい。個人向けも要注意。